

Title	表紙 目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.9 (1960. 9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600901--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

林業発達史調査会編『日本林業発達史・上巻』……島崎隆夫 70
 ——明治以降の展開過程——

ガルブレイス著 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』……大熊一郎 71

戸原四郎著『ドイツ金融資本の成立過程』……大島通義 71

H. ルフェーヴル著 吉田静一訳『カール・マルクス
 —その思想形成史—』……白井厚 72

W. M. デイシー著 紅林茂夫訳『現代イギリス銀行論』……村井俊雄 73

「豊かな社会」と厚生経済学の三命題

千種義人

一、貧しい社会と厚生経済学

ガルブレイスは、その著「豊かな社会」(J. K. Galbraith, The Affluent Society, 1958)において、貧乏という問題がほぼ解決され、国民が豊かに生活できるようになったアメリカ社会を描き、そこでは所得分配の不平等は重要な経済問題ではなくなり、経済的保障も完成に近く、生産の増大すら必要でなくなったと述べている。この著作では、厚生経済学については、直接には論及していないけれども、貧しい社会を対象にした厚生経済学が「豊かな社会」の成立と共に、どのように変化しなければならないかを暗示している。

「貧しい社会」の中から生まれしてきた厚生経済学は、当然のこととして、貧乏の克服をその実践的課題とした。厚生経済学の思想は、ペンサム流の最大多数の最大幸福という考え方に基くものであるが、ピグーはこの幸福を物質面において計測し、これを経済的厚生

「豊かな社会」と厚生経済学の三命題

と名づけ、その増大のための条件と手段を明らかにしようとした。ピグーによれば、経済的厚生は、多くの限定の下においては、(1)国民分配分の平均量が大きければ大きいほど、(2)貧者に帰属する国民分配分の平均取得分が大きければ大きいほど、(3)国民分配分の年々の量と貧者に帰属する年々の取得分との変動が少なければ少ない程、ますます大きくなるであろうというのである。第一命題は、社会における総生産、したがって国民所得の増大が望ましいこと、第二命題は、所得分配の平等化が望ましいこと、第三命題は国民所得の安定、特に貧者へ帰属する部分の安定が望ましいことを意味している。これらはいずれも貧乏克服のために望ましい命題なのである。ピグーは、生産を増大させ、貧しい人に所得を与え、所得の変動を緩和して、社会から貧乏を追放しなければならぬと考えた。貧困にしいたげられた社会においては、生産を増加し、分配を平等にし、所得を安定させることが、何よりも大切であった。したがって厚生経済学は、いかにして生産を増大させ、分配を平等にし、